

片桐雅隆『認知社会学の構想』によせてはかえず波の音

芦川 晋（中京大学社会学部）

1. 中心テーゼは、というか、この書物のねらいは、著者によれば、

・「カテゴリーが自己や相互行為、ひいては社会を構成する」ということ。つまり、カテゴリーは対象に先行する

「したがって、自己、相互行為、集合体は、カテゴリー化の作用によって生じるのであり、逆に言えば、それらのカテゴリー化が働かなければ形成されない」198。

・現代社会における集団の自明性の解体を考察する

「あらためて言えば、「認知社会学の構想」とは、カテゴリー化の作用という点から自己や社会とは何かを考えることをとおして、社会学を構想しようとする試みである。そして、そのような理論的関心は、先に述べたような集団や組織の自明性の解体に感覚に根ざしている」10。

・とはいえ、その中心にあるのは一種の「ミクロ・マクロ問題」であるように思われある。つまり、それがどのようなものかはともかくとして、局域（相互行為）と全域（自己および集合体とその同一性）との関係を問題にしている。

「カテゴリー化は、〈いまとここ〉において個別的、偶発的に達成されるものであっても、その局所性には還元できない相互行為の形成にとって不可欠である」81。

「結論から先に言えば、自己のカテゴリーは歴史的な産物であり、したがってその場その場での相互行為の形成はけっしてミクロな現象ではないということである」38。

「集合体はローカルな実践として相互行為において形成されると考えることが重要である」128。

*「集合体も基本的には相互行為の実践によって形成されるというのがわれわれの視点だが、〈いまとここ〉を超えた相互行為の超越性や連続性を説明する概念として、ここでは「集合体」を「相互行為」と区別して用いていることを断っておこう」112。

2. ところが、認知社会学における「ミクロ・マクロ問題」の結節点は、カテゴリーではなく（?）、相互行為にあるようだ。

なぜ、相互行為と結びつけられなければならないのか？

- ・ 適応されるカテゴリーの偶有性、つまりは時間的な変化・流動性、と
 - ・ カテゴリーが適用される「対象」の時間的な連続性、
- を保証するのが相互行為だからである。

「自分自身をあるカテゴリーによって見なしていたとしても、他者がそれとは異なるカテゴリーを付与してくることは例外的ではないし、またその付与は自己の持つ客観的な属性を根拠とするのではなく文脈依存的なのである」129。

「カテゴリー化は相互の行為の予期を可能とし、また相互の過去への遡及的な理解を可能とすることによって、相互行為をその場その場で生み出すのである」130。

- ・ 認知社会学におけるカテゴリーと相互行為の微妙な関係。

カテゴリーが自己、相互行為、集合体を可能にすると言いつつ（つまり、カテゴリーは説明変数ではあっても、被説明変数ではない？）、他方で、自己や集合体の成立を相互行為からも説明している。

「自己や他者の類型化やカテゴリー化は、相互の行為の予期や動機の推論を可能とするが、類型やカテゴリー化の付与は一義的に行われるのではない。また、特定の類型化やカテゴリーがあくまで特定の相互行為を生み出すのであって、具体的な出会いの場面での別様な類型化やカテゴリー化の可能性を排除するものでもない。「相互行為の形成」という表現は、そのような意味で用いられている」16頁。

- ・ となると、なんらかのカテゴリーが特定の相互行為で適用可能になっているというのはどのようなことなのか？

エスノメソドロジーならリフレクシヴィティ

たとえば、ガーフィンケルが、「アグネス論文」で行っていたのは――

ギデンズの構造化論なら、構造の二重性、行為と構造の弁証法

認知社会学では？ 名前づけと役割取得（本書 58 頁あたり）

「名前づけとは、対象への定義であるが、それは単なる認知的な定義ではなく、行為の方向づけ、対象への評価の機能をもつものである。つまり、特定の対象をどう認知的に定義するか、あるいはそれらをどう評価するか、またそれらに対してどう働きかけるか＝行為するかについての合意があって初めて相互作用が成立するのである」『変容する日常世界』50。

「つまり、役割取得とは、特定の役割を守り、そこに規定された行動を演じることそのものではなく、特定の場の中で、どのような役割が妥当しているかを理解しえ、そのような役割を用いることによってその場の自明性、一貫性を維持していく試みなのである」『変容する日常世界』51。

3. 対象を構成するカテゴリーの類型の確認

- ・ 具体的な他者を呼びだしてくる「役割カテゴリー」：組織で配分される役割など、

カテゴリーは対になっていて、自己があるカテゴリーを適用される場合に、それに応じて呼び出される他者（とその局面）も決まる。役割カテゴリーは自他関係の認知地図である。

「シンボルとしての特徴づけられた役割とは、自己をどのように位置づけ、どのように行為すべきかについての視座（パースペクティブ）を示すものであり、われわれはそれを「役割（カテゴリー）」（あるいは「役柄」）と言い換えることにする。そして、それは、規範や期待を含むもののそれらに限定されない。また、役割（カテゴリー）が他の視座（パースペクティブ）一般と区別される重要な点は、自己が常に他者との関係の中で位置づけられることである」『自己と「語り」の社会学』37頁。

・ 一般的な他者を呼びだしてくる「集合体の成員のカテゴリー」:

階級、ジェンダーなど

「なぜなら、上司や部下、教師と学生などの地位の担い手として相互を名前づけるのではなく、企業や学校などの集合体それ自体の成員として相互を名前づけることも、同じように相互の定義や予期を生み出し、そのことによって相互行為を形成するからである」60。

- ・ その時代に特有な「人間類型」: 新人類、おたくなど
- ・ 近代的な自己

ステレオタイプは？

4. 集合体の成員カテゴリーについて

集合体の成員のカテゴリーが論じられてくる議論の流れを確認しておく、役割カテゴリーと集合体の成員のカテゴリーの区別は重要なポイントなのだが、その違いにシンボリック相互行為論は注目してこなかった（60頁）。そこで、自己カテゴリー化論が参照され、さらに、このカテゴリーも相互行為を形成するという話の流れ。

・ 集合体の成員のカテゴリーはどのように作動して、相互行為を形成するのか？

あるいは、集合体の成員としてカテゴリー化されるとはどのような事態を想定しているのか？たとえば、相互行為のなかで「集合体の成員として」ふるまっているということ？しかし、それはどういうこと？

・ そもそも、集合体のカテゴリーは役割カテゴリーと同じように「役割取得」で回っていくのだろうか？たとえそうだとした場合、集合体のカテゴリーはそもそもクラスのカテゴリー一なわけだから、適用があらかじめ期待されるような場面を除けば、役割のような相補性を単純に想定できるとは思えない。あるいは、「マクロ」な事柄が問題になるケースも、その場面では役割に基づいていたりする。

この点が、はっきりしないために、相互行為のなかで集合体が形成されるということが、より具体的にはどのような事態を指すのかははっきりしない。

一つの可能な考え方として

・①「役割カテゴリー」のように「集合体の成員カテゴリー」が相補的に作動しないとすると、相互行為のなかで「集合体の成員カテゴリー」を適用することは相互行為のなかで攪乱要因をもたらすことになるだろう（もっとも、これは、役割カテゴリーでも妥当する。ある人物に適用可能だが（たとえば、父親）、その場面（仕事）でレリヴァントではないカテゴリーを適用するときでも似たような事態を引き起こせるから）。

たとえば、ゴッフマンがスティグマで問題にした食い違ったカテゴリーの適用というのは、このような事態だと考えられる（たとえば、仕事の場面で、女であるとか、人種であるとかいったことが、問題にされるなど）。もっとも、そのアイデアの源泉はジンメルまで遡れるだろうが（相互行為の可能性条件を問題にする、ジンメルの新カント派的な理論設定は、認知（あるいは認識論的）社会学的だと思われるのだが、ジンメルに対する評価は如何？）

このとき、複数のカテゴリーにかかわる期待に対応することを強られるのでどう振る舞ったものか当事者は当惑することになるし（100頁）、その場面からすれば個人的なことが女とか人種といった一般的なカテゴリーでもって問題にされることになるから、パーソナルな事柄を問題にしなが、その内実は極めてステレオタイプにはまったものだったりすることになる。

・②本書では、役割カテゴリーおよび集合体の成員のカテゴリーとの関連が論じられないまま、ステレオタイプが論じられるが、これらのあいだにはどのような関係があるのだろうか？おそらく、一つの見解は上記のようなものだと思うが---

・③こうした経験によって、女であるとか、黒人であるとかいったことを意識せざるをえないとすれば、ある集合体に対するアイデンティティとそれに相関した集合体のイメージが、個人のなかに生まれてくるようになると考えてもよいだろう（これに類する指摘は100頁以降）。とするなら、「集合体」あるいは「集合体の成員としてのアイデンティティ」は、相互行為のなかでのスティグマ的な食い違ったカテゴリーの適用から立ち上がるようなものあるいは、そうした経験からイメージ（可能に）されるようなものだということになるのだろうか？

「誰が集合体の成員なのか、その成員は何をすべきかといった、集合体の成員とは何かについてのイメージ（=集合体の成員のカテゴリー）を持つことの中に、そしてそれに基づく相互行為の実践の中で集合体

が形成されるのであってそれらイメージを離れて集合体があるのではない」131。

・④もっとも、「役割カテゴリー」のように「集合体の成員カテゴリー」が単純には相補的に作動しないとすると、後者は主として大衆宣伝のような多数者向けのコミュニケーションで動員されたり、第三者の発言で適用されてくるようなものとなろう。そうすると、相互行為とはどう結びつく。たとえば、国民国家の形成とマス・メディア。

・⑤集合体の自明性の解体とは、成員の抱くイメージによって集合体の境界が決まるからということのようである（131-2頁）。

「しかし、カテゴリー化によって集合体が形成されるという見方は、社会的世界にのみ当てはまるのではなく、集合体一般に当てはまる。集合体の誰がその成員か、その成員の特性は何か、そのカテゴリーに基づいて行為がどのように予期されるかもけって自明ではなく、むしろそのカテゴリーをめぐる闘争が繰り広げられてきた」132。

しかし、相互行為に依存するというのであれば、それは現代社会に特有の問題なのだろうか？

また、「集合体」の境界が不明確であるならば、逆に「社会的世界」と「集合体」（とくに、組織）という概念上の区別は維持できるのか、できるとすれば、どのように区別されるのか？二つの違いは？

5. 自己の同一性論について

・①先に指摘した、集合体の位置づけに関する曖昧さは、自己物語についても指摘できる。というのも、問題を現在の自分と過去の自分の食い違いをどう処理するかというかたちに変形すれば、自己物語が立ち上がる場面についても同様のことが指摘できるからである（そもそも、ゴッフマンが個人の生活誌という概念を導入したのは、スティグマを扱うときだった）。

・②ただし、自己物語の場合は、役割取得との関連は想像しやすい。というのも、その都度の個人にかかわりのある過去の事柄がなんなのかは、その都度のカテゴリー化に依存するからである。そうすると、その都度の相互行為のなかで個人にとって呼び出し可能になる記憶イメージの連なりがその都度の自己物語（？）

「何を想起するか、また何を忘却するかという想起をめぐる営みや、それに基づき物語るという営みは、他者を前にして行われる。そして、想起すべき内容や物語を規範的なものとして相互に付与し合うことによって相互行為は形成される。われわれは、自己物語がカテゴリー化の作用によって構築されることに注目し、カテゴリー化による物語の構築が、自己物語を同一的なものとす 驍7とを指摘した。しかし、自己

物語は、自己に内在した認知的な営みに所産ではなく、他者を前にした相互行為的な場面で同一的なものとして構築されることの所産である」160。

6. 集合体の同一性論について

・①ただし、これが集合体の場合になるとそうはいかなくなる。たとえば、集合体の同一性を説明する以下の指摘。しかし、これは相互行為のなかでどう統合される？

「われわれが目指したいのは、世代による解釈や想起の違いを越えて集合体の同一性を確保するのが、カテゴリー化の作用だという点である」181。「一つのカテゴリーのもとで、ある特定の特徴をそれに入れるものと死、また別の特定をそのカテゴリーに入らないものと区分けすることによって、同一性を構築していく。そして、そのようなカテゴリー化の作用は、ある時点での空間的な多様性を括るだけでなく、時間的な多様性も括る働きを持っている」183。

・これは裏返せば、ある場面においてなんらかの集合体のカテゴリーが適用されるとき、そのカテゴリーによって呼び出される特徴がいかなるものになるかが、「個人のくぐりぬけてきた個別的な状況」におさまるとはかぎらないということを意味する。つまり、この点からも、集合体のカテゴリーがいつどのようなかたちで適用されるかは、役割カテゴリーのようにはいかないということ、言い換えれば、単純に役割取得のメカニズムが作動しないということ、を暗示する。あらためて、集合体の成員のカテゴリー化とはどのような事態なのか？

・②こうして、同一のカテゴリーで括られながらも、その内包が多様化かつ断片化し、異なる場合の帰結。

スティグマ問題が発生する（ゴッフマンは、凝集した集団の場合、スティグマ問題は起こりにくいと指摘していた）。

「記憶の私化」や「集合体の自明性の解体」：集合体のカテゴリーに相関して呼び出される特徴が流動的になるのだから、集団の成員カテゴリーが適用される局面が曖昧になっていく、適用される局面でコンフリクトの可能性が増大する、ひいては、それをふまえた戦略が生まれてくる、といったことが起こりそう。

・他方、認知社会学では、同一のカテゴリーに多様な特徴が包摂されることと、記憶の私化とのあいだは断絶的にとらえられているように思われるが、上記のように考えることができるのであれば、むしろ、段階的・連続的なものと考えべきではなからうか？

「われわれが目指したいのは、世代による解釈や想起の違いを越えて集合体の同一性を確保するのが、カテゴリー化の作用だという点である」181。

「つまり、現代社会においては、過去との連続性が失われ、過去は遠い異邦となり、その典型として、先

祖は、集合的記憶を共有することによって形成される「記憶の共同体」の成員ではなく、異邦人となったのである」188。

7、終結部では、現代社会における集団の自明性の解体は、記憶の私化あるいは個人化と、それに伴う認知枠組の変化にあるとされているよう。さっき（5）と違う。

「想起の単位が集合体から個人へと移行してきたことは、カテゴリー化と想起という観点から見れば、想起の枠組みとして家族や国家の成員などのカテゴリー化が機能せず衰退してきたことを意味している」190。

「今日、家族や企業のあり方に象徴される集団や組織のあり方が変動しているとすれば、それは人々が持つ集団や組織についての認知枠組みが大きく変わってきたからである」218。

そうすると、カテゴリーの同一性はどのように判断される？